

令和7年度 須崎市総合教育会議 議事録

日 時：令和7年1月29日（木）午後1時27分から午後2時31分

場 所：須崎市総合保健福祉センター 3階 研修室

出席者等：市 長：楠瀬 耕作

教育長：竹内 新

委 員：徳久 和宏、尾崎 恵子、松岡 健夫、岡田 和美

事務局：教育次長 西村 浩司

生涯学習課長 福本 博一

子ども・子育て支援課長 市川 ゆかり

学校教育課長 森光 和明

学校教育課教育政策推進監 前田 裕史

学校教育課長補佐 岡崎 美紀

学校教育課指導主事 角 彩乃

1. 開会

【楠瀬市長（以下、市長）】

本日はお忙しい中、ご出席いただき、ありがとうございます。

皆様におかれましては、日頃より須崎市の教育等にご指導賜りまして、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

この総合教育会議は、私と教育委員会が十分な意思疎通を図り、本市の教育の課題や目指すべき姿を共有する極めて重要な会議でございます。現在、本市を取り巻く環境は、急速なデジタル化の進展や、不登校児童生徒への対応など、複雑かつ多様な課題に直面しております。

加えまして、人生のライフスタイルも随分変わってきたわけございまして、これから新しい時代を生きていく子ども達の教育の在り方も見直さなければならないと思っております。そういうことで、須崎市教育変革ビジョン Make”IT” Fun の取り組みを開始したわけでございますが、その進捗状況や来年度の教育行政方針を本日の議題として挙げさせていただいております。すべての子どもたちが、自らの可能性を信じ、安心して学び成長できる環境をいかに整備していくか。これは教育委員会のみならず、行政全体で取り組むべき優先事項であると考えております。

本日は、皆様の専門的な知見や現場の声を反映した、活発なご意見をいただけますと幸いです。この会議を通じて、本市の教育がさらに前進することを確信し、開会の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議題

（1）教育変革ビジョン Make “IT” Fun について

取り組みや進捗状況について担当課長から説明。

【事務局】

補足や質問、ご意見があればお願いします。

【教育次長】

補足。

A I を活用した授業デザイン、A I × 英語については、文部科学省の実証実験事業として採択されており、県下では須崎市だけとなっています。来月早々には、文部科学省に事業結果を報告しに行く予定となっています。A I × 教育として安和小学校、須崎小学校で事業を進めています。

「Change」

全国学力調査についても結果が揃ってきていますので、これから分析に入ることとなりますが、結構、力をつけている学校がいますので、楽しみにしております。

「Customize」

LITALICO というプログラムを活用し、これによって特別支援教育の質的向上を図っています。

非認知能力の醸成というところで、Atelier for KIDS を継続して取り組んでいます。

本年度つぼみの日を設定し、支援が必要な子どもに対して保育園と小学校が連携を図るため、教育活動について参観し、意見交換を行っております。

「Create」

プログラミング教育や、探究的な学びに今後チャレンジしていきますという中で、オラトリカルコンテストを実施しました。須崎市独自でオーストラリアへの海外フィールドワークを実施し、10 名の中学生に参加してもらい、実施しました。

「Collaborate」

すさきデザイン、1 月 31 日の午前に小学生のプレゼンテーション大会、午後が中学生のすさき CUP ということで、実施します。2025 年はその他にも色々なチャレンジを行っています。

【事務局】

ほかにございませんか。

【委員】

Make” IT” Fun の取り組みを進める上で、細田先生がいる大きな意味は何だろうで考えた時になかなか教育改革が進まないと言われていた中で、細田先生が教育改革を強く進めて行く推進役というイメージがありまして、細田先生が Make” IT” Fun の旗を振ることによって、教育現場の空気感が変わったとかそういうことがあるのかなど。学校の先生方に細田先生の熱量が伝わって、須崎市の教育を変えなきゃという空気感の変化がありますでしょうか。

【市長】

Make” IT” Fun は、細田さんが掲げたものではなくて、細田先生が来る前に教育委員会の職員が色々視察に行き、作ったわけでございます。以前、石川県加賀市に視察に行きました。加賀市の教育長は、文部科学省から来られた島谷千春という教育長であり、2 年間で色々改革しようとしていました。そこでお聞きしたお話の中で、学校現場でこれをすぐ理解してくれる教職員は、ごく少数、1 割ぐらいかもしれない。でも、その 1 割が大事でそこから広がっていくという取り組みになってくるという話を聞いてきたわけです。温度差は推進役と現場とであります。その温度差を、時間をかけて縮めていくことがひとつ大事ではないかなと思っています。推進を進めて行く力というものは、結構あるのではないかなと思っています。

【委員】

実際、細田先生が来たことで、学校現場の空気感などは、どんな感じですか。須崎小学校でラーニングコモンズの見学をさせていただいた時にも目に見える変化は分かるのですが、目に見えない変化というものは、どんな感じでしょうか。

【教育次長】

委員のおっしゃる通りで、色々な考え方、捉え方があるかと思います。今やっていることは、現状の学習指導要領の中身をやっています。やらないといけないことになっています。須崎市が特別なことをやっているわけではない、国、県の方向性をベースにしながら須崎市ができること、やってみたいことにチャレンジするというで集約して4項目にまとめています。これを推進するために教育委員会が各学校へ事業の説明をしに出向きました。

学校においては、その事業に対して、わくわく感を持ってくれる人もいれば、消極的な人もいて、100%理解してくれたとは思っていませんが、ある一定の理解を得ながら進めていっている状況です。

須崎小学校を中心として、他市町村からの視察が来ています。教員の研修として学校全体で来るということもあります。そういう実践をしている学校については、モチベーションや熱量が上がっている。熱量の差はまだあると思っています。時間をかけてでも縮めていく取り組みを来年度進めていかなければならない。

【教育長】細田先生が来る前と来た後でどう違うのかという点につきまして、須崎市に私と細田先生が来たタイミングは、ほぼ同じで、Make” IT” Fun を取り組み始めた時にはいましたので、来る前はどうかというのは分かりにくいところです。私も細田さんが学校に対して、校長会などで説明するときには、細田さんの考えと私の見え方は、ずれるようには見せていないつもりです。石川県加賀市の当時の教育長も、文部科学省からの出向で、そこら辺が泣き所ではあるのですが、どうしても私の前任の細木教育長のように10数年もできるわけではないです。少なくとも、細田先生がいる間はそう変わらないのではないかなと思っています。

(2) 令和8年度 教育行政方針について

担当課長から説明。

【事務局】

質問や意見、補足説明等あればお願いします。

【委員】

異文化交流ということで、須崎市には海外から技能実習生が来ていますが、その人達との交流で週1回日本語サロンを実施するなど、須崎市も外国の方が住みやすい町になって、労働力の確保という意味で須崎市にアドバンテージがあるといいなと思うところですけど、その取り組みの一環で、生きた国際交流、異文化交流ということで、例えば子ども達に英語に触れあってもらう機会として、技能実習生が教育現場に来て、実際に英語で話をしてみるということが可能なのかどうなのか。技能実習生をお客さんとして扱うのではなく、色々な所へ入ってもらった方がまさに生きた異文化交流ではないかと感じます。先日新聞で、外国人労働者が非常に助けになっており、いなくなるとは困るという記事が載っていました。

フィリピン人の農業実習生やインドネシアの漁業実習生とお互いが知り合い心と心が通じあえる機会を増やしていくといいなと思います。

【教育長】

来年度、ALTを保育園、学校に配置する方向です。目の前の人がフィリピン、アメリカなどなら、当然文化も違うし、一人ひとりの生い立ちも違います。そういう人たちと会話をして相手の人が何を大事に思っているのかということをしちんと理解するために、英語を勉強する意味があるだろうと思っています。それが国際化、異文化交流だと私は思っています。これから須崎市の教育を受けた子どもが須崎市に残ってくれたら、国際的な須崎市になっていくのではないかなとそういう楽しみは持っております。ALTを配置する意味を学校にも理解してもらいたいという思いは持っております。

【委員】

学びの改革の所で、子どもが主体的に学んで書いているのですが、ここ数年、学校訪問させていただいたのですが、前に訪問した際には居眠りしている子どもや気になる子どもが目についたのですが、特に須崎小学校では、今年、私がみた限りでは、そういう子どもはいなかったです。やっぱりそれは、子どもが目的意識をもって学習に取り組んでいるから、自分のやりたいことをとことん探究している授業だから生き生きしてやっているのではないかなと思いました。それが全部の教科につながっているかは分かりませんが、確かに子ども達は生き生きとして授業をしている、やっぱり好きじゃないと楽しくないと続かないので、この取り組みを続けていくのは賛成です。

学校ですので、学力も大事になってくると思うのですが、全国学力調査は、その時の6年生、その時の中学生での学力調査であって、学年が決まっている。学力調査を受けた子どものその後の到達度が分からない。例えば1年生の時は、このレベルだったけども6年生でこのレベルに上がったなどが分からない。学力調査を受けたその子ども達を経年で見ていくことが大事ではないかと思いました。確かに一生懸命に楽しくやっていますが、それが学力とどうリンクしていくのか検証する方法も大事ではないかなと思いました。

【教育次長】

委員のおっしゃる通りで、毎年、学力調査を受ける子どもが違う。そういうことで去年の数値と今年の数値を比較して大きな影響があるかということ、それだけで学力の分析の仕方にならない。国・県・他市町村も全国学力調査の結果を公表しているので、どうしてもこれだけのデータしかないかと思われがちですが、学校は、この他にも到達度テストなども行っており、そういったデータを持ち合わせていまして、子どもの学力の伸びを経年評価できるデータも持ち合わせています。

また、デジタル化が進んで、学んだことが全部データで残っていくというように変わっています。なので、学力が伸びたのか、落ちたのかが可視化できる状況になってきました。

【委員】

部活動の地域移行について、横浪のカヌー場やスケートパークなど須崎でしかできないクラブ活動もあるので、地域の子どもが活用できるようにしてもらいたい。

【市長】

部活動の地域移行について、指導者の問題、移動の問題がある。これを真剣に考えていかないと、先生の働き方改革にもつながっていかない。次年度から2つの中学校になるが、できるだけ現状のクラブの活動の継続はしてあげたい。

【教育次長】

部活動の地域展開、指導者の問題、移動の問題、学校の部活を地域へ展開していくことは、全国的にも動いているので、情報を得ながら進めていきたい。

(3) その他

特になし

3. 閉会